

桑原羊次郎著 『北尾次郎博士の逸話』 付 米田稔述『北尾先生の思出』

— 紹介と翻刻 —

西 脇 宏

紹介

今回ここに紹介・翻刻するのは、北尾次郎の従兄弟であった桑原羊次郎（号 雙蛙）が書き残し、松江の松村家に保存されてきた北尾次郎に関する手原稿の一部である。原稿に印刷上の書き込みが全く見られないことから、松村鑊の個人的依頼により羊次郎が執筆し、手稿のまま松村家に伝えられてきたものと思われる。全体は四部から構成されている。すなわち、「北尾先生の思出」「北尾次郎博士の逸話」「北尾留枝子君に就き」「松村寛裕翁夫妻と鑊子女史」の四部である。このうち「北尾次郎博士の逸話」以降の原稿には通し番号が打たれており、羊次郎によって一連のものと考えられていたことがわかる。したがって本稿では、第一章「北尾次郎博士の逸話」をそのまま原稿全体のタイトルとみなすこととした。今回は特に次郎と関連の深い前半二章のみを翻刻し、第三章「松村寛裕翁夫妻と鑊子女史」は翻刻対象からは除いた。

また、「北尾先生の思出」の原稿も羊次郎の手によるもので、「逸話」冒頭の記述とは齟齬するが、米田が提供した資料をもとに、その「追憶」を羊次郎が整理、浄書したと考えられる。「思出」全体の一五枚と「逸話」の一三

枚目までは、「三〇〇字詰 東京市麹町區富士見町二ノ八 雄山閣原稿用紙」を使用しているが、一四枚目以降は「雙蛙亭原稿用紙 三九〇字詰」が使われている。このことから、まず「思出」を原稿化した後、羊次郎が自らの執筆に取りかかった成立の経緯が明らかとなる。しかしながら今回の翻刻では、「思出」を米田稔述『北尾先生の思出』として、『逸話』の後に付録として収録することとした。

著者の桑原羊次郎は、「桑原文庫」により島根大学ともゆかりの深い人物である。明治元年に現在の松江市末次本町に生まれ、中学卒業後上京し、明治二二年東京神田英吉利法律学校（中央大学の前身）を卒業した後、ミシガン大学に留学し、Master of Lawsの学位を得た。明治二八年には松江電燈会社を創立し、大正九年には衆議院議員に選出されるなど、地域の振興に大きく貢献した。また、山陰盲啞保護会理事長、私立松江盲啞学校長などを歴任、先駆的社会福祉事業家としても活躍した。さらには、浮世絵、彫金などの美術工芸の研究家としても一家をなし、『逸話』にも述べられているように、明治末には渡欧し、各国の博覧会などで日本美術の紹介にも力を尽くした。『思出』末尾の日付などから、昭和一五年頃と推定される『逸話』執筆時には、羊次郎はすでに七〇歳を越えていたが、なお長生し、昭和三〇年に米寿の生涯を全うした。美術工芸、郷土に関する著書も多く、『桑原文庫目録』には「桑原羊次郎氏著述目録」が作成、掲載されている。

最後に、北尾次郎に関する数少ない伝記資料の翻刻という本稿の学術的意義に深いご理解をお寄せくださり、翻刻をご快諾くださった松村富士子氏、桑原弘道氏両氏に心よりお礼申し上げます。

凡例

一 翻刻に際しては、用字法、仮名遣いなど、できうる限り原文に忠実であるように努めた。加筆、訂正部分ではきるだけこれを生かした。ただし、筆跡などから見て、別人による可能性のあるもの、明らかに別人によるものもあり、これらに関しては註をつけた。

- 一 原文には用字法、濁点の扱いに不統一があり、句読点法にも独特のものがあるが、羊次郎の手稿の忠実な活字化という観点から、これらもそのままとした。原文のままでも十分理解可能と考え、明らかな誤字等もそのままとし、いちいち「ママ」の傍記を加えることはしなかった。
- 一 変体仮名は通行の仮名に改めた。印刷の制約上、慣用字、異体字で字体を変更したものもある。
- 一 読みが確定できない箇所には、「？」の傍記を入れた。稿者による註は、本文中に(一)のように番号を付し、末尾にまとめて記載した。
- 一 汚損が激しく翻刻を断念した一段落をのぞき、判読できない部分は字数分の□で示した。
- 一 原稿にはないが、段落冒頭の字下げを行った。

翻 刻

北尾次郎博士の逸話

次郎博士の傳記は既に松村鉄豊君の記念帳によりて其詳悉を極め居れども、松村君より予に何にか同記念帳に漏れたる逸話あれば、後年の為め之を認め置けとの事なり、そこで明治十七年より北尾家に出入せし米田稔翁にはかり、同翁が次郎君に接觸せし當時の事共も予と共に之を執筆し置くこと、なし、昭和十五年三月同翁か其追憶を認め携帯せられしは即ち別冊である、翁時に齡八十七歳なり、米田翁の記憶のよきに反して、予の記憶の衰へたるは近來殊に甚しく、為めに年月日の誤も尠からざるべきと懸念すれども、そは後年更に訂正する事として、思ひ出づるまゝ之を左に述ふる事となせり。

次郎君は明治元年二月十五歳を以て東京の開成所に入り、先づ佛語を学び、同年十二月大阪大学南校に移り英語及び究理学を修む、明治三年抜擢せられて同年十二月三日横濱出帆のグレート・リボベリク号に乗込み、米國經由

にて独逸に留学せらる、同行は伏見宮殿下（元上野宮なり）独逸御遊学を初筆として、東久世正五位池田謙齋山脇玄大澤謙二西園寺公望森有禮外山正一神田乃武等次郎君を加へて合計三拾七名なり。

次郎君は明治三年末日本を出發し、独逸に滞在する事約十三ヶ年間に於て、明治十六年帰朝す、時に齡三十歳なり、次郎君の年齢と生年に就き従来の記録誤りたるもの多し、そは明治元年開成所入學の際、年齢の足らざりし爲めに、嘉永六年の生と届出したれども、其實は翌嘉永七年即ち安政元年七月四日松江片原町松村氏方に於て誕生せられたるなり、次郎君の渡歐は明治三年、即ち予の三歳の時なれば、予に何等の記憶なきことは當然のことなり、唯予か中学生時代即ち明治十四年頃に記憶し居ることは、次郎君か独逸留学中、其父母若しくは予の母に來る信書の返事は、其信書の中に封入し來る次郎君直筆の独逸文宛名の状袋を使用する事なりしも、時には其状袋の來らざる事あり、かゝる時に、次郎君の独逸の宿所を書くものがないとて弱つた事があつた、此簡單極まりたる手紙の上書すら一寸知つたものが少なく、然るに幸ひ予の中学同級生に門野留五郎と云ふ人あり、此人の父君は縣の會計課長で、此人の實兄に山口久四郎と云ふ松江医學校の生徒が居て、之に頼みて上書をして貰ふた事が毎々であつた。次郎君の松江婦郷（現松江）は慥か明治十七年の六七月の頃であつた、それは、予の庭園の枇杷が成熟して居た故に、之を次郎君と留枝子君に上げた処が、留枝子君は独逸にてはこんな菓物は喰べた事がないとて、非常に珍重風味せられたる記憶があるからである。

今の富烈君が未だ留枝子君の御腹に居られた時であつたが、次郎君が松江滞在中は、随分奇聞があつた、當時松江に於て外國人と云ふものは、宣教師の外は先つ見たことがないと云ふ次第で、殊に婦人而かも松江出身の北尾さんのお輿様で獨逸人なりと云ふことが、いたく松江人を衝動せしめて、其騒は大變なるものであつた、次郎君か妻君同道にて市中を買物に歩くと云ふと、市の老若男女か其身邊を取りまき推しな推し（推）の勢で、後よりゾロ／＼ついて行くと云ふ有様にて、留枝子君の神經を高めて次郎君も閉口せられ、到底市中見物の散歩は出来ぬ事となれり、然し親類巡りは是非せねばならぬとあつて、其行程は先つ松村氏門前の京橋川の石垣より船に乗して大橋詰にて上陸し、佐藤氏を始め歴訪せば、群衆をまくことが出来やうと云ふ考案にて、或日門前より次郎君夫妻と身近き人々

四五人が乗船出発せし所が、ソレ唐人の奥様が船に乗つて行くと云ふ騒となり、片原町の川端今の三階楼の前や日本銀行支店前など、京橋川の両岸に群衆は列をなして見物すると云ふ騒にて、次郎君夫妻は愈々降乗して居られたりき。

次郎君夫妻が当時帰國の挨拶に訪問せられし先々は、第一に最も縁故深く且つ幼年時代教育を受けられたる祖父山口卷石翁の外中原の山口家、當時は卷石翁は死去にて次代の山口正蔵氏、次に松村寛藏氏、内村鱸香先生、次郎君の叔父桑原小四郎氏佐藤喜八郎氏と予の家位のものなりしと思ふ。

當時予か家は未だ松江市京店時代にて、次郎君夫妻は奥座に通じ、俄に供へ付けたる椅子テーブルにて種々滯歐中の談話あり、亡兄猪太郎二十二歳予は十七歳で、欧州文化の珍聞奇談に耳を傾けたるものであつた、予が明治廿四年渡米の決心をなしたるは、蓋し次郎君の此時の談話が予を刺撃せし訳である。

次郎君か各家庭を訪問せられし際、山口にせよ佐藤にせよ奥様か外国人と云ふので、木製の怪げなる椅子テーブルを奥座敷に供へて之に招請せしものであつた、食事は予は能く記憶せざれども、次郎君夫妻か婦朝以来東京居住は既に一ヶ年許りを經過せし事故、日本料理を喫せられし様に思ふ、但し刺身と大根漬は奥様数十年后迄ては嫌いであつたと記憶する、後年には何れも大好物となつたが、留枝子君は左足か義足であつた訳のみではないが、元来外国人は靴足袋丈にて應接すると云ふ事は非常なる失禮となること故に、親類巡りの際、玄関さきの白庭より奥座敷に通られしに、靴其儘なりし様に記憶せり、勿論座敷に上かる、前に、能々靴を掃除して畳の汚れさる様注意せられたり様に覺ゆ、席上次郎君は需に應じて得意の鉛筆画或は毛筆畫を試みられたれども、各家共に何時しか人に與へて散佚して今に傳來するもの甚だ尠なし、唯松村寛裕翁の門人にて、能義郡母里村の内藤寛乎君方に、毛筆画の優れたるもの数点あり、其内最優秀なる一幅は今日松村鉄豊君の所藏に歸して居る、次郎君はペン画も最も得意なりしも、松江に之を藏するもの少なし、予は君の名著「森の女神」の挿繪数百枚中彩色画にて最出来よきペン画二枚を留枝子君より贈られて、今尚ほ之を藏せり。

次郎君には實弟鎌三郎君ありたれとも早世なり、二妹あり、セキとエイなり、セキは西山樗三郎氏に嫁し、其子

に九大教授西山重和氏あり、エイは松村豊吉（鏝豊）氏に嫁して、豊吉君今猶ほ現在大陸綿の試作に大成^ト功を収め居らる、次郎君の母系の従兄弟としては、山口慶次郎同淳三郎と予の兄猪太郎と予の四人なりし關係上、次郎君の海外談には、此等の従兄弟が最も傾聴せしものであつた、

次郎君松江に到着の節に、一面して、直に氣の付きしことは、同君が鼻眼鏡を懸け居られたる事である、鼻眼鏡とは左右の鈞なくして、鼻の上部に於て一種のバネにて止まる様になり居るものなり、日本人は一般に鼻梁骨か低き故に止まり兼ねるものである、我々は此眼鏡か物珍しく、次郎君に聞き、たる処が、同君曰く、此につきて面白き談しあり、独逸に於いては、学者間学生間を通して此眼鏡を使用すること大流行にて、此眼鏡はゴム紐にてチョッキの釦に留め置く故に、萬一はずれても墜ちて傷む虞なき重宝なるものなり、然れとも日本人は一般に鼻梁骨低き為めに使用し得るもの甚た少なし、某日本学生あり、独逸到着以来、洋服ネクタイ、カラ、カフス、靴等一切新調して独逸学生と見境なき迄に至りたれども、唯流行の鼻眼鏡は懸くれば墜つると云ふ危険ありて、毎に上むきに歩行し居たる際、公園内にて小溝のあるに氣付がす、否な下を見ること出来ざる為め、此小溝に墜落せり、公園内のこととて衆人の喝采大笑する処となり、左すがの独逸氣取屋も再び鼻眼鏡を使用し得ざりし笑話ありしと談されたり。

次郎君は松江は数十年あこがれの郷土、何時にかわらぬ其風光と親戚知友の懇情等、暫く故宅に滞在の豫定なりしに、次郎君か大金を独逸より携へ歸^トられたりとの訛傳^トを信せし為めか、一夕松村家に盜賊這入りたる事あり、留枝子君は大恐怖をせられ、元來松江方面の家屋の戸締の如何にも不完全なることが曝露したるなぞ、一層留枝子君の不安を惹起し、夜中ろくに安眠を得られざる有様となり、俄然歸東の問題おこり、次郎君も辯護につとめられたれども其効なく、急遽遂に松江を出發して東京に歸られたり、次郎君は此後松江再遊の希望ありしも、留枝子君の懲り方非常にして、毎に大反對せられしを以て、再現するに至らざりき。

明治十八年予は松江中学を卒業、同十月末松江出發上京す、前以て北尾家と打ち合せ置きたる故に、成るべく次郎君の官邸に近き所と云ふ譯にて、本郷区森川町一番地の某下宿屋に投せり、其翌日早速大学構内の官舎に次郎君

を訪問せし処、其翌々日か日曜日に、次郎君は予を同伴して椅子テーブルと本箱を一つ調へ與ふべしと云ふ事になり、其日に本郷通りにて家具屋より希望の品々買求めて下宿に帰りたる處、椅子は普通の木椅子にて、籐の網張りなりし故に、長時間据りて居ては痛いであらうと云ふので、留枝子君が座布團を作りて與れられたることありたり。予は當時、取り敢えず小石川の同人社に通学すること、なりたり、當時の同人社の先生中には、坪内雄藏日高眞實岡氏あり、何れも文学士のほやくなりしと思ふ、又有賀長雄先生も居られたり、中村正直先生は時々教室を巡視せられたることありて、其風貌を記憶せり、謂ふ迄もなく、中村先生は同人社の社主にして、文学博士で、實に當時福澤先生と共に學界の耆宿なりき。(十五)

次郎君の官舎は帝大構内で、謂ふ迄もなく赤門内の左り側、餘り遠からず、間数は沢山なかりしも、平屋の洋館であつた様に思へども、唯中二階の様なものがあつた様に思ふのは、次郎君と談話中に、突然立つて階上に走り去り、暫くして復座せらるゝことがあつた故に、予は今何の御用でしたかと尋ねた處、屋上に氣象觀測の装置を作りたる故に、其為め夜中にも時々見巡はるのであるとのことであつた、勿論當時は觀測に使用せられし器械とて、今日より見れば不完全のものであらうが、然し此次郎君の氣象觀測が、後年日本氣象学に貢獻せし事甚大なりしとのことである、其一例は次郎君の大氣渦動論の如きは、歐米の學者に先んじて提唱せられて、歐米の學者が、之を巧に粉飾して日本に逆輸入せしことは、氣象學者の夙に看破する處であるとのことである。

一日次郎君を同官舎に訪問せし処、隣りの官舎に住居せる米婦人來訪せられし際に、此夫人と留枝子君との對談が、米独語にては彼此通ぜず、次郎君か此中間に立つて通辨せられたるは一寸奇觀であつた、後に聞けば、此隣りに住居せる米婦人は、帝大傭教師フェノロサ氏の夫人とのことであつた、謂ふ迄もなく、此フェノロサ教授は、日本美術の眞髓を世界に紹介し、天心岡倉寛三君をして其大をなさしめたる人であり、又芳崖雅邦を提擲して遂に再び世に出し其天才を發揮せしめしも此人の力であつた。

次郎君専門の物理学は、東京大学理学部に必需のものなりしに、意外の出来事にて遂に理科大学を去り、東京山林学校に轉するの止むを得ざる事が出来た、此間の事情は、当時理科大学にて助手或は学生なりし二見鏡次郎長岡

半太郎田中館愛橘等諸氏は能く御存じであらうと思ふが、當時理科系の総帥は菊地大麓氏で、英米派の教授連の中に、次郎君丈けが独逸系と云ふので、既に学派の争ありたる際、之を助長して遂に次郎君が退避せざるを得ざりし一事件と當時傳へられたる問題は、たゞ事件であつた。

即ち當時の理科大学長菊地氏が、何にか数学の解答を塗板に書殘して之を消さず、其儘教室を去られし處、之に入り代りて次郎君が教室に入り、塗板を消そうとせし時、フト菊地教授の解式を見入りて、何心なく此解式にても至極よいが、寧ろこんな風に解式せば一層簡単ならんと、直に其方式を示し、後直ちに自分の授業を始めし所、無邪氣なる学生連のこととて無邪氣の点に人氣のありし北尾教授を轟頂する意味もありて、北尾教授か菊地教授よりえらいと云ふ評判を立てたる故に、英米派の教授連が聴き捨てず、愈氣まずいこととなり、学園的の嫉妬も手傳ひ、遂に理化大学教授を去るこゝとなりたり、當時次郎君と明治三年独逸留学を共にせし松野礪氏が、東京山林学校々長たりし關係上、同校教授専任となり、明治十九年頃王子飛鳥山に近き同校官宅に轉せり、此夏^{十九}休暇中、予は同官邸の玄關一間を占領して何にかと北尾家の御手傳をなし居たり。

北尾の官舎は、日本館にて全部畳敷の部屋なりしを、薄べりを布きつめ、ベッド椅子テーブルと洋間風に裝飾せり、八月頃次男兵馬君出生、然るに當年は近年なき酷暑にて、兵馬君腦膜炎を患ひ、祖父北尾漸一郎医は勿論松江出身の多納光儀医師北尾門人吉本幾太郎なぞ交代にて詰切り介抱せしも其甲斐なく二十日許りにて死去せられたり、留枝子君は産後病児の看護に餘念なく、次郎君は書齋に引き籠り毎夜夜明近くまで勉強し、それより臥寝と云ふ習慣なり、それ故予は、二歳の長男富烈君の御守役として、毎々飛鳥山辺まで連れ歩いたるものであつた、又隣り官居の松野校長も其夫人は独逸人にて、其間に「フリーダ」嬢あり、五六才位と覚えしが、是も毎々北尾方に見えて、富烈君の友達であり、此少年少女の為に予は毎々蟬や蜻蛉取りをやつたなぞ今に思ひ出が深い。

王子附近の蚊軍は實にヒドイものであつて、手織の木綿浴衣にても其針は容赦なく之を通す程の劇しさには閉口した、次郎君の夜学はと見れば、書齋の眞中に二畳敷程の小蚊帳を下げ、其中に椅子テーブルを置き、臺ランプは蚊帳の外側に置きて、読書或は書き物をせられたり、此の小蚊帳は丈け低くき故に白金巾を下部に継ぎしたるも

のであつた、深夜予は偶然目醒めたる際に、玄関より中の間を通して書斎を眺むれば、次郎君が煙草をくよしながら、ワイシヤツ一枚にスリツパを素足ではき、瞑想に耽り、時々ペンを動かされたる当年を追想するのである。

明治十九年七月駒場農学校と山林学校合併して東京農林学校となり、次郎君其教授たり、明治二十三年東京農林学校が東京大学農科大学と改称せらるゝや、引續きて其教授たり、其の爲め次郎君は一時番町に引越し、駒場に往復せられたれども、餘り不便なる故に間もなく駒場の農科大学構内の官舎に引移られたり、其隣家は同大学の助教多羅尾某君の住居で、多羅尾先生は日夕北尾家を訪問せられて居た、予は当時神田錦町三丁目高知堂と云ふ下宿屋に居たが、日曜毎に駒場の官舎を訪問せしものであつた、交通機関の発達せる今日とは異なり、約三里も隔り居たる所を歩行で往復せしことゝて、夜分は何時にも大に疲れたものであつた。

當時に限らず、北尾家の生活は極めて簡素のものであつた、それと云ふのも、次郎君の初任給は理科大学教授でタシカ月俸八拾円、其後山林学校兼務で月俸三四十円の別収入があつたと記憶するが、何れにせよ薄給であり、且つ細君か欧州人と云ふので、臺所も大根漬に冷飯と云ふ訳にはいかず、日本人の奥様の臺所より慥かに多費であつた、加之、松村實家へ月々十円の送金と、独逸留學時代官費の休止途絶せし際借り入られたる学資金の返済等、誠に手詰りたる会計であつた、それ故に、帰朝當時は久しく下女が居ず、松江より手傳に行き居たる、次郎君幼年時代の乳母なりしと聞く、お樽と云ふ六十以上と見ゆる餘り役にもたぬ老婆か居たのみであつた、榎木割りを始めとして水汲み等の荒仕事まで、義足で不自由なる留枝子君の働き振りは並ミ大抵な事ではなかつた、予をして家庭的の細君として最も理想的なる婦人は、独逸人に過ぐるものなしとの世評を首肯せしめた。

松平家が四谷鮫ヶ橋に廣大なる土地を買入れ御邸が新築せられて神楽坂より移轉せられし際、其隣接地二百坪を同値即ち一坪貳円にて分譲を蒙り、次郎君の設計にて新家か建築せられ、此新宅より日々常備の人力車にて農科大学に往復せらる事となり、當時は又東大理科の教授も兼任せられて本郷へも往復せられ居たり、両大学への往復に相當時間を費せし事なるが、毎日々々其間は如何にして居らるゝかと云へば、勿論例によりて読書にて、独逸文のものが多かつたであらうが、予か一二度氣の付きたることは、次郎君か手にせられしものが、水戸西山公の旅行記

とか眞田幸村一代記とか云ふ様な武勇傳記ものであつて、曳子（車夫）の言ふ処によれば、旦那か時々車上に於て思はず快哉を大声さるゝに驚く事あるは、蓋し西山公とか幸村の大活動の箇所を読まれし時でありまじやうと、言ひ居りたり、是も次郎君の天性無邪氣天真爛漫（ト）たりし一つのあらわれでありしと思ふ。

明治廿四年予は外國遊学の希望を述べ、何分予は弱体故に以太利は南國に適く氣候温和なりと聞けば、同國ポロニヤ大学は如何と尋ねたる處、次郎君は同し以太利とて、ポロニヤ辺は風土よろしからずとの事、且以太利語を更に修学の必要あるを以て、旁々予は遂に米國シガン大学に入学の事にせり。

予は帰朝以來、家庭の都合により松江に住居し、明治三十三年頃より神戸方面に在勤せし故に、北尾家とは自然に疎遠となり居たり、明治三十五年三月次郎君官命により欧州視察を命せられ、約一ヶ年許りにて帰朝せられたる後、予は上京の砌同君宅を訪問せしが其時は東信濃町の家は既に独逸建築技師某氏に譲り渡し、代々木の本通りに新居を作り居られた時なりしと思ふ、予は次郎君に欧州特に独逸に於ける御感想は如何なりしやと尋ねし處、君は曰く、首府ベルリンも明治十五六年君が同府を辞去せられて以來、約二十年を經過せし事故に、非常の膨脹振りにて、家と云ふ家、町と云ふ町、皆殆んど全部が其外觀を一新して旧時の觀なく、全く知らぬ所に初めて来たりし感ありて、却つて寧ろ甚だ面白からず、大学時代の恩師も多くは黄土に歸し、同窓生も離散してベルリン府上旧知も尠なく、日本に於て豫期せし程の興味がなかつたにはいたく失望せりとのことであつた、又一奇談とすべきは、勿論留枝子君との夫婦連の旅行であつたが、妻君は明治十六年以來日本にありて、餘り独逸人との交際はなく、親戚姻者下女等何れも日本人許りの交際にて、日本語には熟達せられて居たが、独逸語は忘れられたる事少なからず、独逸旅行中（ト）汽車内などにて、独逸人に呼び懸けられて話せし際、妻君独語がわからず、次郎君側より日本語にて通譯（ト）せしことありたりとの滑稽談もありたり。

次郎君の樂しみの一として話されたる事は、大学某教授の如きは、其教材は独逸人某の著書の翻譯にして、之を聴く学生は毎年交代する事故に、同じ講義録を繰返して濟まし居れども、自分の教材は、年々新刊の独英佛の著書雑誌より取り入れる故に、何時も講義に新鮮味ありて、其講義の掌控も年々斯く其冊数を増加すと悦び示されたる

ことありたり、^(二十五)如何にも君の責任感の強く、且つ学生指導に其全力を擧げられたるかを知るべしである、趣味としては、ピアノの演奏か得意にて、読書筆記に倦れたる時は、往々別に聴者があると云ふでもなく、自分独りで楽しみ演奏して居られたり、次郎君の煙草好は有名なものにて、家内に於てはマドロス型小形の煙管に煙草をつめて朝より絶えず喫し居られたり、外出等には多くはシガーをふかし居られ、紙巻煙草は使用せざりし様に覚ゆ、餘りの喫煙にて、何時も書齋内は烟氣立籠め居たり、予は次郎君の死去の原因はニコチン中毒なりしならんと想像せしに、糖尿病が原因にて脳症となりしと聞きしは、誠に意外千万であつた。

次郎君の生涯は誠に坦々たるもので、何等の変化と險路もなく、官費を以て独逸に留学し、学成りて帰京、大学教授となり、毎日の仕事としては午前九時頃若しくは十時頃起床、朝食直に登校、午后帰宅、それより書齋に入り読書若しくは筆記し、夕飯済み更に書齋に入り、十二時過ぎ迄勉強と云ふ事を繰返したるに過ぎずして山水をめづるとか観花賞月と云ふ様な風流は聞いたことがなかつた、尤も日曜とか他の日の午后なぞ来人あれば、客間に通して談笑し、往々滑稽百出する事あり、また菜園等を見巡る事もありたり、友人とても沢山なかりしやに見受たり、死期近く迄往復せしは、農科大学の佐々木忠次郎博士で、次郎君死去後、同博士は北尾家のことにつきて万事を後見せられしやに聞けり。

次郎君の体格は、元來寧ろ頑強と云つてもよく、父君に似て背幅も廣く、肺力も強大であつたと思ふ、唯身長は母君に似られたと見えて、五尺そこ々々であつた、平素は至極壯健で、予に言はるゝには、人も五十になれば初めて人間となるので、それから先きが眞に研究時代で、人間一生の事蹟究明理想か完成するのである、故に自分も五十以後にはウンと力を入れて、何にか後世に残る仕事をして置きたいとの力強き談であつたが、五十を過ぐる僅か四歳にて帰幽されたることは、誠に返し返し^(二十四)も、残念千万と、予は何時も此語を思出す毎に嗟嘆するのである、又君をして長命せしめざりしは實に我國の一大損失なりしと謂ふも決して不當の諛詞ではあるまいと思ふ。

予か倫敦滞在中、明治四十三年五月六月号の「ストランド」と云ふ雑誌に、日本の各学界に於ける傑物二三人を撰出して、其小傳を附したる中に、理学者に北尾次郎博士あり、小説家中に川上眉山君ありたるを駁かなりしも其他

の人々は失念せり、此雜誌を日本に持帰らんと考え居たりしに、予の當初の行程は、五月頃開催の日英大博覽會に美術部を執掌し、同會閉會同時に帰朝の見込なりしも、杉村瑞典公使の紹介によりストックホルム府開催の日本品展覽會に招聘せられ、同會閉鎖後、以太利羅馬に於て翌明治四十四年三月より開催の同國建國五千年記念博覽會に關係する事となり、同府滞在、翌四十五年米國滞在、大正二年帰朝に至る迄て、歐州各國を漫遊する事二回、何時も此雜誌を行李の内に入れ置きたるも、遂に紛失今猶ほ之を遺憾に思えとも再獲の方法なし、兎に角数多き日本科学者の内より二三人を撰びし中に、次郎君を見出せし事は、予か當時最も愉快と感せし処であつた、斯く次郎君の名聲は、我國に於ては一向知らぬ人が多いが、却つて歐米に於ては今猶ほ日本の理学者として学者間に知られ居ることである。

次郎君の独逸文に熟達せられたる事は、独逸文学者間周知の事なりしと聞き、それかあらぬか、予の知る所に於ては、先年（明治二十年頃カ）北尾家を訪問せし処、二人の学者の來訪あり、辞去せられたる後に、予は君に唯今來訪の御方はドナタでしたかと尋ねた所、先般印度にペスト病発生せしとのことにて、其調査研究の爲め派遣せられたる青山胤通博士及び某博士の二人であつて、両氏の間独逸の調査報告書か出来上りたる処、一應之を内見して呉れとの事であつたとの故に、同報告書に次郎君の關係校閲せられしことは間違なし。

又時の帝大總長加藤弘之氏が、権利哲学（二十）とか題せし新著を公にせられたる際、邦文より之を独逸文に翻譯を頼まれたる事ありて、次郎君之を執筆せり、其他斯の如き事度々ありたるべけれども、實際予の耳朵に触れたるは此二件であつた、思ひ出のま、之を附記し置く。

次郎君の遺品と見るべきものにて、予の家藏たるもの下記數種に過ぎず、即ち同君写真は、在独中同君廿五歳の時の分と、帰朝後大学教授たりし時の分の二枚、論文は卒業論文と見ゆる独逸文のパンフレット一冊（二十）、自画は鉛筆画は散逸して前記着色の小画二枚と、外に同君居室に逝去の日迄懸り居たる、同君以太利漫遊中に獲られたりとして誇り居られたる、ミケランゼロ作、羅馬サンピエトロ、インヴィンコリ寺のモーゼスの大理石像、是は萬世不易の神品の稱あるものにて其大寫眞一枚と、ギドレニ筆、羅馬ロスピグリオシ宮の天井繪なるオーロラの圖、是は世界

最美の裝飾画なりとの公評あり、且つ又世界十二名画の一なりとの褒詞ある繪畫の大寫眞一枚と二枚共何れも金縁入りの大額面なり、此二品共に、予羅馬滯在中實物目睹鑑賞せしものとて、興味一段と深厚にして今に愛翫措かざるものである。

北尾留枝子君に就き

留枝子君には男兄弟が二人、女姉妹カ二人で、君は妹の方であつたと聞いて居た、留枝子君は五尺二三寸の身長と思ふか、姉君は自分より餘程低いと話されて居た。

次郎君か官費留学中、其期限が経過して学費に差支られしことがあつた時の、独逸駐在の日本公使は青木周藏氏であつたが、次郎君の働き次第、謂は、青木公使に能く々々頼み込めは、官費延期も不可能ではなかつた様なれども、例の天眞爛漫率直にて、何等かの技巧を用ゆるとか、秘密運動をやると云ふ様な働がないと云ふよりは、寧ろ次郎君にはそんな暗躍に氣か付かぬと云ふ方が本當にて、官費期限が切れたれば、一應公使に話して出来ぬと見れば諦も早やく、知人先々に帰國のことを辞はり巡わられし際、篤志家があつて、次郎君の前途に多大の希望を抱き、今頓挫さしては可愛想なりとて、学費をつ、け呉れる人があつて、引続き大学にある事になつたとの事である、次郎君が留枝子君の父君の内に下宿せられしは、此頃のことなるべく、留枝子君の四人同胞と次郎君とは、洵によく平和な愉快なる家庭生活であつたとの事である、留枝子君の直話に、自分姉妹の部屋は丁度次郎の隣室で、毎朝次郎か床を離るゝ際に「ドッコイシヨ」と懸け声して起き上りし故に、何時しか我々姉妹は「ドッコイシヨ」と云ふことを覚えたり、蓋し自分が一番初めに覚えし日本語なりしと予に話されることありたり。

留枝子君は片足の不自由なりし為めか、交際場裡に立たれし事はなかりし様に思ふ、従つて平素往来せらるゝ、知人と云ふものも極めて尠なく、たまに來客と云へは、養父北尾漸一郎君夫妻位のものであつた、飯塚納君の令嬢は其母君が独逸人なる關係上、毎々北尾家を訪問せらる事があつた、一日予留枝子君と話して居た処へ、此令嬢が驅

け込み来られ、留枝子君を別室に引張り入れて、叫喚の聲暫く止まざりしが、聽て令嬢は叮嚀に留枝子君に挨拶して辞去せられたり、予は後にて、留枝子君に令嬢が何故に啼泣大声にて騒れたるやと尋ねたる所、留枝子君は、是亦君の知人にて嘗つて独逸に留学せる豪男が、實に言語同断なる不良漢なるに呆れて下の事情を話されたり、曰く、豪男は平素甘言を以て此令嬢を誑かして、某月某日即ち明日大森の教會にて結婚式挙行の段取にて、令嬢は其支度をなし居たる際、本朝の新聞紙（新聞名失念）に豪男は愈明日午前何時より銀座教會に於て某牧師司會の下に、某子爵令嬢何子と結婚式を挙行せらる、との記事を発見し、飯塚令嬢は一見して失神状態となり、取り敢えず北尾家に駆付けて、豪男に欺かれて危くも隠し妻となるの恥辱を免れたりとの、其悔恨と憤激を泣き泣き訴られたる次第とわかつた、豪男は當時財界のキケ者として、渋澤栄一子爵逝去後は、隠然大御所の觀があつた人であつた、尤も予の知友の某新男爵は嘗つて予に、豪は寧ろ無能な男で、其の推し出の立派なる為めに人の尊敬を得たる、見懸け倒しの男であると批評し居られたるは蓋し通評であらう、それは兎に角、同日に二個所にて結婚式を擧ぐるとは、實に前代未聞の新案にして、二重結婚なぞの問題ではなく、何れ正式に届け出らるゝは子爵令嬢にして、飯塚令嬢は日蔭者として一生を終られたるへき運命なりしは、實に危き次第であつた、予の察する処によれば、豪男がドツカ北歐あたりの爛熟頹廢せる小説の趣向によりて思付きたる新狂言なりしなるべきに、秘密を厳守せし計劃か、一新聞記者の不注意により世間に暴露して遂に失敗に了りしは、天網恢々粗にして漏らさずと云ふへき歟、此飯塚令嬢につき一言し置んに、身体極めて強健にて、日本人として稍高く、極めて快活なる人にて、語学の天才あり、独佛英の三國語は勝手に話されたりとのことである、予よりは餘程年下であつたと思ふ故に、今猶ほ健在せらるゝこと、思ふ。

留枝子君は取り立て、何にか非常に天才的に上手なりしとは聞かざりしが、家庭の主婦としてドコ迄も、所謂世話女房的であつた、是れが寧ろ篤學なる次郎君の配偶者として無類の好組合せなりしと見えた、留枝子君は次郎君の多趣味に似ずして、音楽繪画すら之に興味がなかつたと思ふのは、繪画の展覽会とか音楽会に出席せられたことも聞かず、又食事の時にも其噂は一向聞かざつた様に思ふ、次郎君出勤後は、小供の世話と炊事の支度にて、其餘

暇中には懇志な来客中にも、編物は手を離されざる程であつた、従つて編物は餘程上手であつた、一時は駿河臺の成立学舎女子部の編物の講師として勤められたることもあつたが、何分足が不具合にて、往復共に是非人力車を要すると云ふ不便があつて、永くは続かざりしと記憶せり、次郎君の夏服の平常着は大概留枝子君の裁縫であつたが、冬服は本職でないと善く出来ぬと言つて居られた、自分用の婦人服は全部自分で裁縫されて居た、予のはき居たる靴足袋も、全部留枝子君の手編であつたが、足裏の中部と踵は能く破れるものと云ふので、此個所には必らず絹糸を二本毛糸と共に編込んであつて、慥に普通の商品よりは二三倍の壽命があつた、此工夫は洵に重宝であつた。

北尾家の三度の食事も極めて簡素なるものであつた、予は能く記憶せざれども、午飯には毎々呼はれたものだが、何時も軽きスープの外に、牛鶏肉の少許と馬鈴薯と青豆の一皿とコーヒートパンと云ふ処が普通で、食後の菓物の外に乾葡萄入りのカステラ様の菓子かつくのが例であつた様に思ふも遠き昔のこと故はつきりせぬ。

何にか誕生日とか祝事の時には、魚類等の別菜二皿位がつく事もあつた、一年中で最も御馳走はクリスマス夜の当夜で、番町より義父母の臨席もあり、極懇志の人々四五人も見え、予も何時も其末席を汚したものであつたが、何分交際狭き北尾家のこととて、御客の数は少なきものであつた、此日食堂にはクリスマスストリーを建て、之に種々の裝飾を施し、小蠟燭を沢山枝上に点し、其樹の下にクリスマスプレゼントを陳列し、洋菓子クルミ等沢山供ひ置きありたるを頂戴し、又クリスマススケークを頒ちて貰ひ、洋酒コーヒー等をいたゞき、一夕の歓談をつくす事であつた、予へは留枝子君特製の上等靴足袋とネクタイか何にか小品二三点が定例のプレゼントであつた、次郎君逝去後クリスマス祭か引続き行はれたか、予は之を知らない、留枝子君は久しく代々木の宅に住居せられて、下女一人と寂び住居し居られ、後に富烈君と同居せられたる様に思ふ、留枝子君晩年のことは富烈君御夫婦が一番能く御承知であるから、何れ御記録か出来ること、思ふ。

北尾先生の思出

小生が北尾博士に知つて□□□は明治十七八年の頃なり、それは、高橋基一先生（号は愛山元と朝野新聞記者にて世に知られたる人にてこの頃は自由新聞記者なりき）^(三十七) 主唱にて弘道書院といふ書林を經營せられ、（資本主中には松平家々職の人々数人ありしなり）専ら新刊發行（有賀長雄先生の著書最も多し有賀先生は元老院小書記官未だ博士ではなかつた）、其當時小生は弘道書院店員なりき、^(三十八) 而して高橋先生の盡力にて北尾次郎博士が普國法字原理とか云ふ題にて一本著述せられ、之れを弘道書院より出版せらる。其當時原稿受取等にて北尾家に入出す、（北尾家は麴町区三番町であつたと思ふ、後四谷区松平家裏門出口の近き所に移轉）、出入之度重なるに隨て弥愛顧を受けることになりたり、其當時の所感は、先生の身の丈は高きにあらずれども、永年独逸に居られし為めか、體格が西洋人に似たるように思はれた、此の如きは洋食のみ食せられし為めかと思ひしなり、先生は永く日本を離れて居られし故、日本語は殆ど忘れしとの事（永い間西洋人のみ交際せし故日本語は忘れしに帰朝前になりては日本人も多く渡歐交際せし故日本語を聞き思出したりと）、己に忘れられしことに付一例あり、小生伺候中、奥様が何歟云はれしに（独逸語故小生にはわからぬ）、先生は小生に仰せらるゝに、今^(三十九)前を何か賣り歩くものがある、あれは何にかと尋られし故、豆腐屋でありますと答へたるに、直に奥様に何にか云はれ、更に小生へ、今前を呼び歩くは鑄懸屋ではないかと尋ねたりと、然るに先生はそれが知れなかつた為め、小生に尋ねられしがわかりしなり、東京の豆腐屋は油上げ豆腐雁もどき等種々呼ぶ、其節は謡に似て居る故に、話し家が下手な謡をうたふ人のことを、豆腐賣りになぞらへし位なるに、先生は未だ御承知なかつた、数年後には謡式呼び方を止めて、鈴を振つて歩くことになれり。

先生が色々光線の話があつて、後三分角長二三寸位のものにして稍琥珀色のものを通して机上を見、そしてその物を回はずと机上に三巴形ともいふやうなものが回轉せる、之れが物理学上面白き理義のあることのやうに御話

を承りしも、解することを得なかつた。

又其書齋の壁には、裸體美人の繪（鉛筆画でありしやに思ふ確と覚えず）^(三十一)を自分で書いたとの御話しであつたが、其時代裸體美人の繪などは嫌ふ遺風が染み居し故、只變んに感した故にドンナに御答せしや覚えず。

先生著書普國法學原理とかいふ書物は、出版後賣行きがハカ／＼しからぬ故に、普國云々では世間に知れかねるから、獨逸云々と題名を変へた方がよからふといふことを云ひし人があつた、是は内村邦三氏ではなかつたかと思ふ。前記書物の文の内に、是の詳細は附録に記述するといふやうなことがありし故に、附録は何時頃出来ますかと伺ひしに、先生は附録とはと反問せられしも、其本書に附録云々とありし故、小生は又附録と答ひしに、遂に通せず、此時傍に内村邦三氏が在りて、北尾先生に向ひ、附録とは……洋語にて陳べらる、ア、あれが日本にては附録といひますか、ソレなれば何んとか御答がありしなり、同郷人間の話しに通辯がいりしは又妙であつた。

小生弘道書院を退き、芝区赤羽際にある海軍兵器局に採用せらるゝことになりし故、御披露に行きしに、大に悦んで被下しなり、ソシテ君はエライ、漫りに他人に頼まないで試験を受け採用せらるゝ、は何によりである、而も、僅か一人入用の処に三十餘人試験を受けて君一人採用せらるゝ、何によりである、然るに此間、松江の某より添書を持參し、何か職業に就くやう世話して呉れと云ひし故、君は何が出来るかと思へば、何んでもやりますといふ故、何んでも出来るとは虚言だ、此節の世の中には、何にか一ツの事が出来れば、ナンボでも職業に就くに困まることとはない、何んでも出来るといふのは、何んにも出来ないとの事だといつてやりました、何か一つ出来れば、君の如く人に頼まないでも、試験採用等人が待つて居るからねーと悦んで頂いた、然るに其後兵器局にて大砲の口栓に非常に苦心せられ居るといふことを聞き、それに就き一の考案をうかび出したりし故、其話しを先生に申上げた所能々考案して分らないことがあれば、何時でも聞いてあげるといふて被下、力強くなりしも、役所の話の結果放棄することになし、間もなく日本鉄道會社に就職することになりたり、前記砲口栓考案御話の際、圓積計算のことを申したるに、先生の仰せには、日本にもその算法が解つて居るかと思はれし故、我か松江には關流が開けて居りますとて、同算法のことを御話せしに、君はそんなことが解かるなら、我々同僚等の計畫にて物理學校を設立したか

ら入学の世話をしてやらうかといはれしも、錢もうけをなしつ、学校に行く事は難事と思ひ、之れを願はざりしことの遺憾は、今尚ほ忘れざるなり。

御令息様御誕生間もない時、乳母車は何程位するものか價位を調べて呉れとのことなりしが、漸く銀座にて見付し故代價を聞き、しに十五円とのこと、但し籐にてのみある今頃は世間にありふれたるものであつた、この事を先生に申上しに、独逸にては二三円のものであると大に驚かれた。

獨逸の人間は親切である、ドモ日本人はそんなにないとの感じがあつたらしい、その一例にての御話は、自分は官費留学生であつたが、一時中止となつた、その時は實に困つた、何分金がなければ帰朝するより外仕方ないから、その為め懇志な先きへ挨拶に行きしに、或人が、君今日本に帰つたとて未だ何も出来て居なくて仕様がないてはないか、一つの事が出来たら帰るがよいとのこと、何分官費中止となりては資金が續かぬ、日本は程度が卑いから融通が出来ぬことを云ひしかば、君一人所用の金位些々たるもの故、取換てやるから帰らずに勉強せよと云はれ、遂に其旨に隨ひ、今日となりて帰りしなり、帰りても僅かな月給故、大に儉約して少しづゝにても返辨して居る、此間も二百円送金したり、僅なる給料、又た一家計営の際、金の入用の時コンナ心配せなくてもよいと懇な手紙を呉れられたと、其親切を悦び話された事がある。

或日先生式臺にて大喝一聲大に詰責せられし声を聞く、小生は例の書齋にありて何事かと驚き居たるに、暫くして来られ、日本の商人は甚た不埒であると、それは家内は義足であるので、獨逸に二個拵へて居るが、其一個過般毀損せし故「いはしや」(東京日本橋町名忘る)にて修繕させた、三円を要せし故、支拂をなしたることあり、又た先日損たる故、其義足を修繕をなさしめしに、只今それを持参十円呉れといひしなり、それは損じ方の程度に依り、三円で濟む事もあれば十円を要するものもあるならん、併し前に三円といひしを素直に拂ひし故、勝手に十円といひしにあらざやと思はる、但し全く十円懸るならば、その事を前以て云はねばならぬ、それを無断にて修繕せし故、当方は矢張三円で出来るものと思ふは當然である、それをダシヌケ十円といふ如きは甚た不埒であるから呵責してやつた云々。

此件及び前書添書持参等の時、先生がなされし動作より考ふるに、人は正直に勤勉であるならば、ドコマデモ世話はしてやるも、聊かにも怠慢偽欺等のことをなすならば、十分に破折為さる、御氣質かと乍恐推察することが出来しなり。

是れは少し趣の異ひしことではありしが、本郷区森川町に、森本文齋氏（松江の医師）が學術研究の爲め上京中故、其れを訪問談話中、階下より失火（午后二時頃）、一階より飛び下りて兩人共身を全うすることを得たり、其帰途本郷弓町より春日町へ通する辺にて、先生並に奥様と共に人力車を連ねて行かる、に逢ひしが、小生の顔色が餘程悪かつたと見え、車を止めて君の顔色は非常に悪いがドウカしたかと尋被下し故、前件を申上たり、然るに先生は其事を奥様に御話しになり、御両所より御懇切に御見舞被下、且つ無事に難を免かれたるを悦んで頂きしは嬉しかつた、殊に奥様が大に驚かれ又た無事を悦んで頂きたるやうなれども、言語が通じないのが、モドカシイ状が能く察し得られたことも記憶す。

右様のことありし以来、日本鉄道会社其他の業務に従事、久しく拝接を得ざりしが、明治二十九年鉄道局に身分は卑けれども奉職することになりし故、久振りに伺候す、其時の有様は普通と違ひしに依り、左に之を記せんに、呼鈴を鳴し案内す、之れに應じて女中出で迎へらる、依て名刺を出し先生に拝接を願ければ、奥に入り再び出で書齋に通されしなり、此時先生は大形なる紺飛白木綿単衣を着し居らる、而して椅子に懸り屹立辞儀せらる、小生に向ひ何の用がありて来りしかと訊らる、聊か驚きたり（普通なれば挨拶の後に聞かるべきなるを）、往年度々訪問して様子的一端を知る故、小生は答ふるに、別に用事はありしにはあらざれども、先年會社等民間に勤むるより官途に就くようとお御教示被下たる義に従ふことが出来るようになりましたから、其御挨拶に参上致せしまでなり、即ち鉄道局採用せられて斯々と詳細申上く、此時始めてマツ御懸けなさいと椅子に懸くることを許され、且つ女中に御茶を出すことを命せらる、而して後は往時と同じやうに親密なる御話しを承ることを得、而して君は鉄道局の工事に従事するは誠に結構のことである、鉄道工事中草木等の生えない地盤の爲め困ることがあるならん、そんな地質の処へは、萩、グミ、アカチャ等を植れば、其爲め風化して地味が變ると、之に就きて詳細教示を受く、小生其

を聞き萩グミ杯は知り居るも、アカチャなるものはどんなものでありますかと伺ひければ、大藏省の前杯にある槐に似て居る樹であつて、此所にもあると云ひ奥に入られ、下駄二足を持ちて敷台の方に行き、且つ小生を呼ばれし故それに行きければ、下駄を揃へて履くやうに云はれし故、それを履き、但し先生に揃へて頂きたること誠に恐縮せしなり、次て玄関脇にあるアカチャ樹の繁茂状を示し、且つ色々の此樹に依て地質の変ること等教を受く、而して元の席即ち書齋に復帰、種々雑話に興せらる、此時の懇情と初め君は何の用があるかと云はれし時の状との違ひ、實に他に例はあるまいと思ひ、今猶ほ忘れざるなり、但し先生は自ら努むることをなさずして、漫に他に頼らんとするを嫌はれしと、又如此人の屢々来ることを忌まれしに基つもの歎と察せしなり、但し是は曾て某氏の添書持参當時の話しを承りし事を思出しをり、依て交際を求めんとする人も自ら隔たりを生せしならん。

先生は大に煙艸を好まる、然も専らシガーを喫せらる、小生弘道書院店頭に在つて其一本を頂戴す、依而之を喫せんとしたるに、モトを切ることを知らざる故、其俛火を点せんとしたるに火つかず、先生之れを見て、小形のナイフを出し、それにてシガーのモトを切り火を点して被下、始めて喫することを得しことあり。

右北尾先生に拝接せる當時のこと、も思出のまゝ、記述す

昭和十五年三月三日

米田 稔

註

- (一) 『桑原文庫目録』島根大学付属図書館編集発行（昭和五〇年七月）一二二ページ参照。ただし、今回翻刻の『逸話』はその一覽からは漏れている。
- (二) 「であつた」をそのまま削除せず、「なり」と傍記。別人による記入の可能性も考えられる。
- (三) 「した」をそのまま削除せず、「なせり」と傍記。別人による可能性も考えられる。ここにつづく次の段落は、羊次郎の母セツが次郎の実母ヒナの妹であることなどの親戚関係の記述と考えられるが、汚損が著しく、翻刻を断念する。

(四)

次郎の開成学校入学は明治二年のことと思われる。同年十二月に開成学校は大学南校と改称された。当時「大阪大学南校」なるものは存在しなかった。この羊次郎の記述は、稲垣乙丙に依るものであろう。稲垣乙丙「故農科大学教授正四位勲三等理学博士北尾先生の略伝」『科学世界』第一卷第三号「二六一—三ページ。稲垣のこの文は、『北尾次郎松村鎮記念帳』にも再録されている。羊次郎が参看したのはこちらの方かもしれない。西脇宏ほか「知られざる北尾次郎」『山陰地域研究』伝統文化一九八九 No.五 六一ページ、及び平賀英一郎「北尾次郎の伝記的諸事実について」『鶏外』第六一号（平成九年七月）五五ページを参照のこと。

(五)

羊次郎は別稿でも安政元年出生説を展開している。桑原雙蛙「北尾次郎の生年月に就いて」『伝記』昭和一七年一月一五日号三二—三三ページ参照。

(六)

「である」をそのまま削除せず、「なり」と傍記。別人による可能性も考えられる。

(七)

「押しな押し」をそのまま削除せず、傍記により、「推すな推すな」と訂正されているが、別人によるものと考え、この訂正を取らない。

(八)

「供ひ」を訂正。別人によるものかもしれない。

(九)

次郎の帰国は明治一六年二月であるから、「一ヶ年許り」は羊次郎の思い違いであろう。

(十)

「興ひ」を訂正。別人によるものかもしれない。

(十一)

このうちの一枚は、桑原羊次郎編著『島根県画人伝』島根県美術協会（昭和一〇年発行）の口絵第二六号に使用されたものである。

(十二)

「効」を訂正。おそらく別人によるものであろう。

(十三)

「携ひ」を訂正。別人によるものかもしれない。

(十四)

「訛」を削除して、別人の傍記により「誤？」と書き込まれているが、この訂正は取らない。

(十五)

「であった」をそのまま削除せず、「なりき」と傍記。別人による可能性も考えられる。

(十六)

「くはなかつた」をそのまま削除せず、「からず」と傍記。別人による可能性も考えられる。

(十七)

「間敷」を訂正。別人による訂正の可能性あり。

(十八)

「つたが」をそのまま削除せず、「りしも」と傍記。別人による可能性も考えられる。

(十九)

「暑中」を「夏」と訂正。別人による可能性も考えられる。

(二十)

原稿の「漫」は火偏。

- (二十一) 原稿はさんずい偏に氣。
- (二十二) 「通釈」を訂正。別人による可能性も考えられる。
- (二十三) 島根県立図書館所蔵の「手帳」類のことであろうか。西脇ほか 前掲書 六〇―一ページ参照。
- (二十四) 「返し返し」を書き込みにより、「返す返す」と訂正されているが、元の表記を取る。
- (二十五) 加藤弘之『強者の権利の競争』(明治二十六年刊行)のことであろう。平賀 前掲書 八二ページ参照。
- (二十六) ゲッチャゲン大学提出の博士論文『色彩論』(Zur Farbenlehre)であろう。
- (二十七) 原稿の「漫」は火偏。
- (二十八) 二箇所「ドッコイショ」の「イ」は後からの書き込み。
- (二十九) これ以下六箇所「豪男」は、すべて別人の書き込みにより、「豪傑男」と訂正されている。「豪男」を「豪男爵」と考え、この訂正を取らない。「豪男」とは、郷誠之助男爵(1865-1942)のことであろうか。
- (三十) 「貫え」あるいは「貫之」の書き込みをさらに訂正。別人によるものかもしれない。
- (三十一) 「てあつた」をそのまま削除せず、「なり」と傍記。別人による可能性も考えられる。
- (三十二) 「であつた」をそのまま削除せず、「なりき」と傍記。別人による可能性も考えられる。
- (三十三) 「であつた」をそのまま削除せず、「なりき」と傍記。別人による可能性も考えられる。
- (三十四) 独逸理学士北尾次郎編述 山陰学生内村邦蔵校字『普国憲法起源史 上巻』(弘道書院 明治一七年)のことを指す。
- (三十五) 別人により、「あつて後、？」と読点の位置が変更されている。どちらにせよ、意味不分明。
- (三十六) 「思えず」をそのまま削除せず、「覚えず」と傍記。別人による訂正の可能性も考えられる。
- (三十七) 「迎ひ」を訂正。別人によるものかもしれない。
- (三十八) 原稿の「は」をそのまま削除せず、漢字を傍記。
- (三十九) 「揃ひて」を訂正。別人によるものかもしれない。